

古代上総の中心地

国分僧寺と国分尼寺

匠探



復元された上総国分尼寺中門（市原市）

栗山川を境に上総国と下総国が成立したのは、645年前後とされています。710年に都が奈良・平城京（へいじょうきょう）に移され、全国約70の国には現在の県庁周辺にあたる中心地として国府（こくふ）が置かれました。

下総国の国府は、現在の市

川市国府台（こうのだい）・須和田（すわだ）地域にあつたとされ、昨年の図書館主催「歴史ウォーク」はこの周辺を散策しました。今回は、古代上総国の政治・文化の中心地・市原が舞台です。

上総国府跡の推定地は2、3か所あり、今回訪ねる国分僧寺（こくぶんそうじ）近くも含まれています。

741年、時の天皇は諸国に国分僧寺と国分尼寺（にじ・あまでら）を造ることを命じました。当時、全国的に疫病（えきびょう・天然痘）が流行し不作も続き、社会不安を鎮めるための国分寺建設でした。奈良の大仏で有名な東大寺がその代表格で、それより遅れて上総国分僧寺と尼寺も建てられたのです。国分二寺が全国的に整つのは770年から780年代にかけてのこととされ、発願から30年近い歳月がかかりました。上総国分僧寺跡と国分尼寺跡は発掘調査され、遺跡の主要部が国の史跡に指定されて

います。それらは全国有数の規模を誇り、付属施設を含めた古代寺院の全貌が明らかにされました。尼寺跡では、寺の入り口である中門（ちゅうもん）と回廊が復元されました。その施設をながめていると、1200年前の中心地の象徴であることが実感できます。

このころの匠瑳郡に関するものでは、741年に磐室郷（いわむろこう・石室）から奈良の朝廷に送られた貢物（みつぎもの）の一部が正倉院に残され、これが匠瑳郡に関する最古の記録です。磐室郷は横芝光町の小川台周辺ではないか、と考えられています。年代は見られませんが、正倉院には「匠瑳中村郷」と記されたものもあり、多古町南中、北中周辺から送られたものでしょう。

また、平城京跡から出土した木簡（もっかん・木片に墨で文字を記したもの）からも700年代から800年代にかけて「匠瑳郡」と記したものが発見されています。

1200年前の奈良と上総、下総の交流に思いをはせる今回の「歴史ウォーク」8ペーじ図書館だより参照です。

問八日市場図書館 ☎73・3746